

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Creat e , TOHOKU!

2023年(令和5年)12月16日 土曜日

無料

第139号

毎月発行

発行 2023年(令和5年)12月16日 土曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、70歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の【大崎】の【新】の【大】の【い】の【え】の【闘】の【文】の【発】の【本】を【変】え【る】こ【と】を【標】榜【す】。

14年越しー大谷選手のドジャース移籍決定 入団早々にMLB優勝パレードをチームと約束 契約金も史上最高額、契約方法も超ユニーク

14年越しのドジャースに ようやく移籍先決まる

ようやく大谷選手の移籍先が決まった。関係者ももちろん、国内外のファンもじりじりしながら、待ちに待った移籍先決定である。

移籍先は周知のように、大谷選手が高校生だった十四年前から接触を続けてきたドジャースである。

大谷選手も高校一年生の時からドジャース入団を目標に掲げていたと幼なじみが明かしたというから、十四年間も「相思相愛関係」にあったといふことだ。

十四年後の今年にようやく実った「婚姻関係」であり、決定したときの双方の喜びは、「外野」が想像できないほどに相当なものであったことだろう。

そして、今回は、「少なくとも」三度目の勧誘だった。最初は、前述のように、大谷選手が高校生のとき、次は日本を離れてMLBに挑戦を決めたとき、そして

今回である。それ以外にも接触はあったはずだ。

したがって、通常のビジネスライクなプロ野球選手移籍問題の範ちゅうをはるかに越えた、双方にとっても念願の移籍だったのだ。

プロスポーツ界世界 最高の契約額

それと人々を驚かせたのは、その契約額だった。

《十年契約、契約総額七億ドル、円換算で一〇十五億円》という超がつくほど破格の契約金額である。

これは、MLB史上最高金額であるだけでなく、プロスポーツ界においても史上最高額である。何という金額だろう。

非常にユニークな契約

さらに人々を驚かせたのが、その契約の中身だった。ドジャースのぜいたく税の対象となるサラリー総額を下げるのが目的という見方もあるが、契約総額七億ドルのうち六億八千万ドルの97%を後払いにし、後払

いは契約が終わった翌年の二〇三四年から二〇四三年まで支払われることになった。

つまり十年の契約期間において大谷が受け取る額は一年二〇〇万ドル(約三億円)だけで、メジャーリーグの平均年俸の半分以下の数字である。

しかも、後払いは利息が付かないようにしたため、大谷選手自身は確実に金銭的には大損をするというような契約内容である。

さらに、「大谷翔平のドジャースとの契約の中には、慈善団体に1%を超えない金額を寄付する」と「ジ・アシレチック」のケン・ローゼンタール記者が投稿しており、この寄付額も破格である。先般行った、日本の二万の学校にグローブを寄付することといい、桁違いのスケールである。

金銭に淡泊な大谷選手

契約金額の大きさについて「外野」は大騒ぎであるが、大谷選手が金銭欲丸出しでガツガツと交渉した印象は皆無である。

むしろ金銭に関しては非常に淡泊な印象である。その一例がある。

二〇一七年のオフ、MLBの国際選手移籍の年齢制限のルールがあり、あと二年待てば二億ドルから三億ドルと噂された巨額の契約を手に入れたのに、メジャーリーグの最低年俸を受け入れて渡米したことがある。まことに彼らしい。野球を何よりも優先する。野球小僧の面目躍如たるものがある。

移籍メッセージでもエンゼルスを忘れない!

大谷選手らしさはまだ続く。移籍にあたってのメッセージである。

六年間在籍したエンゼルスへの感謝、ファンへの感謝を率直に表明している。大谷選手だから、こうしたメディアで取り上げる形になるのだから、それにしても大谷選手の心情がストレートに伝わってくる文面である。とにかくほっこりする。

エンゼルスへの送別メッセージは泣ける

ドジャースによる移籍発表を受けてのエンゼルスの大谷選手への送別メッセ

ージは泣かせる。わずか六年の在籍でこうした送別メッセージは通常はないのかもしれない。大谷選手だからこそそのエンゼルスの粋な計らいもほっこりする。

移籍契約プロセスでは早くも優勝宣言?

大谷選手はまた、球団を通じて「ドジャースファンの皆さん、私をチームに迎えてくれてありがとう。皆さんとドジャース球団、そして私は、ロサンゼルス街でワールドシリーズ優勝のパレードを行うという目標を100%共有してい

ます」と、コメントしたことである。移籍契約中にもかかわらず、そんなに早く優勝宣言をするなど考えられない。よほどの入れ込みようであるし、意気込みも尋常ではないことがうかがえる。

ほっこりさせる大谷選手

大谷選手から直接・間接



ドジャース入団記者会見 (12/15・8時日本時間) テレビ朝日映像より借用

を問わず伝わってくる一連のメッセージには「ほっこり」する。彼の人柄がにじみ出ている、思わず、笑みがこぼれてくる。

最近の国内のニュースは暗いものばかりのなかで、こうした大谷選手の移籍ニュースにはほっとさせられる。そうした点で、大谷選手の動向は、もう野球の世界をはるかに飛び越えていると思う。

大谷効果もブレイクした

これまでも大谷選手に関するあらゆるニュースは、度肝を抜くものばかりだった。二刀流、MVP、ホームラン王、百年ぶりの記録ラッシュなど、ある意味で野球界の記録も常識も破壊してきたともいえる。

しかし、今回の移籍問題で出現した事柄は、大谷選手が、野球界だけの存在ではないことをはっきり示したといえる。

あまりにもスケールが違いすぎるのだ。

移籍先のロサンゼルスは、移籍で沸き立っているし、移籍前だというのに、ユニフォームその他のグッズが飛ぶように売れている。その経済効果は計り知れない規模になるだろう。来年、シーズン本番を迎えたら、どれほどの騒ぎと混雑になるのだろう。

奥州市から、岩手から、東北から、野球の世界も越えて、世界の大谷へ

大谷選手は東北の誇りである。東北の生きている英雄になるうとしていられるし、東北の生ける伝説にもなるうとしている。

岩手県奥州市から出て、日本のプロ野球で活躍し、さらに、長年の夢であったMLBに移籍し、大活躍し、さらに、名門の常勝チームのドジャースに移籍して、さらに大活躍するのだ。

ドジャースに勝てる相手はいなくなる可能性がある。そのなかで、大谷選手がより光り輝く。

「東北の生ける伝説」、「東北の生きている英雄」は、もう誇張ではない。

MVP二度目

大谷選手に関してはドジャース移籍ニュースで占められ、アメリカンリーグの二度目のMVPはどこかへ飛んでいってしまった。

事前に、MVPは固いと言われていたとはいえ、二度目の満票での受賞であり、すごいことなのだ。

そうしたこともいまの大谷選手には、当然のように受け止められていることが異様なのである。

MVP受賞では「犬」が話題になった。

大谷選手の飼犬で、名前は「デコピン」ということも判明した。

その犬の犬種も話題になり、すごい人気らしい。十年契約のあとは何をするか楽しみ

筆者は、まだ話題になっていないことにいま非常に関心がある。

次々に野球界の常識を塗り替えてきた彼は、十年契約のあとはどうするかという問題である。

十年後は彼は三十九歳。まだ現役で活躍できるかも

しれないが、衰えつつある身体能力をさらけ出してプレーを続けるだろうか。筆者は、そうした可能性を否定しはしないが、もっと別のこと、普通の人が想像もしないことをやっている可能性の方が大きいと考えている。

それは何か？

まず、有り余る資金がある。野球が大好きである。すぐに思いつくのは、どこかのチームのオーナーになること、そのチームで優勝を目指すこと、二刀流の選手を養成すること、などである。

ついで、イチローのように、高校生や中学生に野球を教えること。これも当然やるだろう。

世界中に野球場を作り、野球教室を作ることも考えられる。

それ以外にも、筆者の予想が及ばない領域で、何かをしてかすにちがいない。



大谷選手 MVP発表の瞬間に犬(コーイケルホンディエ)と一緒に・・・デイリースポーツONLINEより・・・この犬は「デコピン」という名前が判明

大谷選手のドジャース移籍のインスタグラムあいさつ —原文は英語 (12/9)

◆日本語訳 すべてのファン、そして野球界に関わるすべての皆様へ、決心するまで非常に時間がかかったことをお詫びします。次のチームとして、ドジャースを選ぶことを決めました。まず、エンゼルスに関わるすべての皆様、6年間私を応援していただいたファンの皆様、そしてこの交渉プロセスに関わったそれぞれのチームの皆様に、心から感謝を伝えたいと思います。浮き沈みのある中でも私を応援してくれたエンゼルスのファンには、特に感謝を伝えたいです。あなたたちの応援と励ましは、私にとってかけがえのないものでした。エンゼルスで過ごした6年間は、永遠に私の心に焼き付けられるでしょう。そして、すべてのドジャースファンの皆様、私はチームのために常にベストを尽くし、自分の最高の力を出せるように努力し続けることを誓います。キャリアの最後の日まで、ドジャースのためだけでなく、野球界のために懸命に努力し続けたいと思っています。こうして記すだけでは伝えきれないこともあります。のちほどの記者会見で今回のことについて、さらに話したいと思います。本当にありがとうございます。

エンゼルス公式声明 (12/11) An official statement from the Angels

大谷翔平は類い稀な才能を持つ野球選手で、この6年間、彼がエンジェルスの一員として、球史を塗り替える活躍ぶりを見られた事が出来、光栄に思います。彼は、自身の実力を活かし野球のゲームで新しい可能性を生み出しました。エンゼルスのファン達は、彼のプレイを間近で見ることができ、とても幸せでした。翔平のエンゼルス球団、そして野球に対しての数多くの貢献に感謝致します。彼のキャリアの新たな門出に心よりご健闘を祈っております

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑤ 震災後の福島 その②

現地案内役の方がいたが何も語りかけることができなかった



誰もいない街で信号だけが点滅していた
(福島県南相馬市小高地区(2013年7月29日))



許可証がなければそれ以上進めない・・・検問所(2013年7月29日)



当時はきっと戻るという意気込みだった、でも結局移転したお菓子屋さん(福島県南相馬市小高地区(2013年7月29日))

震災後の福島南相馬市小高地区への取材

東日本大震災で被災したことに加え、放射能で汚染された福島県の福島第一原発の周辺エリアにどうしても取材に行きたいとずっと思っていた。

いや、取材に赴かなければ、当時の当新聞名でもある「東北復興」の看板倒れになると考えていた。しかし、そこは、地震や津波の被災地だけでなく、放射能の汚染エリアなのだ。したがって、現地の状況も分からず、何の情報もないまま、大した準備もせずに出かけて行っても無駄足になるだろうし、たとえ行けたとしても、大した取材はできないだろうと思っていた。

そこで、取材で現地に赴く何かいい方法はないかとずっと思索していた。そうしていたところ、福島県に複数の工場を持つ「タニコー株式会社」という中堅の厨房機器メーカーの本社(東京品川区)にコネクションができたのだ。そこで、大震災から二年四か月後の二〇一三年の夏、知り合いを通じて、「タニコー株式会社」に、福島県南相馬市の取材に協力して欲しいと申し入れをした。

運よくその申し入れを快諾してくれたので、大震災から二年数か月で、ようやく福島第一原発周辺の取材ができたのだ。案内される場所は、福島県南相馬市にあるタニコーの小高工場を中心とした小高地区周辺を指定された。当時の状況では、福島第一原発がある地域の北側から、部外者が行けるギリギリの場所だった。

鋭い質問が飛んできた。その質問は予想もしていなかった。不意打ちをくらった形だった。しかしそれは、文字通りの「どう見られているか」ではなく、放射能で汚染された福島第一原発周辺地域を東京ではどう考えているのかという質問だと今なら理解できる。

そのエリア周辺が、当時は非居住地等の特別扱いされているが、その地域で消費しない電力を福島第一原発が生産してきたことについて、また、電力の消費地である東京圏の人間がそこをどう思うかで見ているかについて、聞きたいということだったのだ。

そこには、どこにぶつくてよいのか分からない怒りが込められているようにも感じられた。そして、能天気にも、わざわざ現地に取材したいという「物好き」ならば、それくらいのは返答は用意しておくと責められているようにも感じた。

当方も、まったく予想もしない質問だったし、何も準備もしていなかった。まったく返答できなかった。それが放射能で汚染された人が住めなくなった場所の現実の姿であった。筆者はそこに立ちすくんでしばらく動けなかった。

案内役の方の何気ないひと言に返答できず

取材中に案内役を務めてくれた方の口から、ぼそっとつぶやくように出た言葉にもまったく反応できなかった。その案内役の方の奥様は、取材の少し前に亡くなられたという。何の病気で亡くなられたかと聞けなかった。また、聞けるようなシチュエーションではなかった。さらに、震災前には息子さん夫婦が同居していたが、震災後には福島の被災地を離れたという。小さな子供がいたため、放射能汚染リスクからなるべく遠くに避



取材でお世話になった(株)タニコー小高工場

ありきたりな慰めなどをしゃべったら、その空間が予想もつかない状況に陥ったかもしれない。

結局、戻れなかったお菓子屋さん

点滅する信号のある商店街を少し離れた場所で見つけたのだが、ある建物からとても目立つ垂れ幕が下がっていた。

その地域では老舗のお菓子屋さんであろうが、放射能汚染で移転せざるをえなかったのだろう。

しかし、当時はきつとすぐにも戻れるし、戻ろうという意気込みだったのである。

垂れ幕からその気持ちが伝わってきた。

でも結局は、菓子屋さんへは移転したままであり、その地に戻って来ることはできなかったようだ。別の場所に完全に移転したのだ。

いまでもその垂れ幕の写真を写るといたたまれない思いがする。

それが、放射能汚染という現実だったのだ。

検問所手前まで行く

取材でどんどん南下していくと検問所があった。警備員がいて、おそらくは通行許可証をチェックしていたのだろう。

もちろん、許可証がなければ、その先に行くことはできないはずだ。

そこで初めて、福島第一原発がすぐ近くにあり、い

までも放射能が充填している場所のすぐ近くまできていることを実感した。

結局のところ、検問所手前で停止し、Uターンして来た道に戻った。

これらの貴重な体験をした場所を、後に何度か訪ねたいと思ったこともある。

しかし、いざという段になると、そこに行くことを拒絶する自分を発見してしまう。

あまりにも「重い」のである。時間も大分経ち、放射能も大分薄れてきたからまた行ってみようという気分にはとてもなれない。

もし行ったならば、あの鋭い質問の思い出がよみがえってくるにちがいない。

あのゴーストタウンに点滅を続ける信号が幻影のように見えるかもしれない。

あるいは、震災直後の状況が幻影のように迫ってくるかもしれない。

そのようなことが脳裏をよぎり、二の足を踏むのである。

相馬野馬追

南相馬には「相馬野馬追」という郷土の祭りがある。いや、祭りと呼んではならないだろう。

古くから、戦争の多い地域だったようで、その訓練のために騎馬を使った「神旗争奪戦」や「甲冑競馬」が盛んだった。

その祭りは千年も続いて

いたが、あの震災と放射能汚染で、かつてのような規模と開催方式が途絶えたが、取材の時は、震災後の本格的な祭り復興だった。

しかし、そこに参加している武者も関係者もみな被災者である。

騎馬も、津波で多くが死んだ。犠牲者だったのだ。

ストレスで馬場を逆走る騎馬

そこでも忘れられない光景があった。

被災した人間もストレスまみれであつたらう。騎馬だってストレスを感じるはずだ。

「甲冑競馬」の最中に、ゴールを過ぎて騎馬が止まらず、乗り手を振り落として、暴走する騎馬がいた。

たかさんの人が止めようとしても止まらない。走り続けるのだった。

とうとうロープを張って馬を止めようとしたところ、騎馬の足がからまり転倒して、その結果、騎馬は足を骨折した。

馬にとって足の骨折は、致命傷であり、多くの場合は薬殺される。そうした光景を見てしまったのだ。

いま考えると、取材のついでにお祭り見学気分が相馬野馬追など行くべきではなかったと大いに反省している。



相馬野馬追 武者行列・・・みな被災者 (2013年7月28日)



相馬野馬追 神旗争奪戦(2013年7月28日)



相馬野馬追 神旗争奪戦勝者は坂を駆け上がる」(2013年7月28日)



相馬野馬追 甲冑競馬・・・骨折する馬もいた」(2013年7月28日)

遠野ホップ栽培六〇周年 と東北魂ビール

東北とホップ

東北とホップの関わりについては、過去本紙第七一号(ホップとビールでまちを盛り上げる!)と第七八号(東北の大きな恵み「ホップ」で取り上げている。ここでは、東北のホップ生産量が国内生産の九割以上という圧倒的なシェアを誇る。生産地が近いことから、収穫したホップを生のまま使うなど外国産ホップとは違った使い方ができると、ホップ生産からビール醸造につなげてまちづくりを行っている岩手県遠野市のような事例があることなどを紹介した。

遠野ホップ六〇年の歩み

遠野市が今年作った「遠野ホップ六〇年の歩み」という冊子によれば、遠野市でホップ栽培が始まったのは一九六三年。冷害が多かった当時の遠野に適した作物を探していく中でホップに目を付けた。ホップは冷害に強い作物で遠野盆地での栽培に適した作物と判断され、市内の八つの農協が合併して遠野ホップ農業協同組合が発足した。意外なことには、当時はキリンビールはまだ岩手県産ホップを使っていたビールを製造しておらず、そこでキリンビールに栽培契約を協議、これにキリンビールが応じてホップ生産がスタートした。

当時、岩手県内では旧江刺市など既にホップ栽培を行っていた地域が他にもあったが、後発の遠野市でホップ生産が盛んになったきっかけは第一特産農業センターと呼ばれる加工センターの設置であったという。ホップ生産において、ホップ棚や乾燥機の整備などの費用が掛かり、新規就農のハードルが高かった。それを解決するために機械の共同化と機械施設の共同利用を進めたのである。これが遠野市のホップ栽培の急成長につながった。一九六三年に八ヘクタールでスタートした遠野市のホップ栽培は、一九八三年には一一二ヘクタールになり、一九八七年にホップ生産量全国第一位となった。

執筆者紹介

大友浩平

(おおもともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouchi.ootomo

これをそのまま瞬間冷凍させることで乾燥させたホップにはない瑞々しい香りが残ることに気付いた。外国産ホップではコストの関係で到底不可能な、ホップを産地で瞬間冷凍させ、それを近くの仙台工場に運んで醸造という流れで二〇〇二年に「毬花一番搾り」を発売した。二年後に現在の「一番搾り」と改名した時に「岩手・遠野産ホップ使用」と明記され、「ホップの里」としての遠野市の名前が全国に広まることになった。

遠野市ではその後二〇〇七年に市とホップ農協とキリンビールが合同で「TKプロジェクト」を発足させ、「ホップの里からビールの里へ」を合言葉にホップを活かした地域活性化に取り組んでいる。二〇一五年に始まった夏のイベント「遠野ホップ収穫祭」は、コロナ禍での中止を挟みつつも、今や東北のビールイベントの中でも一大イベントとなっている。また、ホップを観光の要素に取り入れて、ホップ畑やビール醸造所なども巡る「ビアツーリズム」の実施、就農フェアなどを開催して市外から新たなホップ農家を募集し、昨年は新たに六名がホップ栽培に就農したという。

ビール醸造所ができるという。ビール好きは地元産ビールのハシゴをしに、遠野市内を周遊できるわけである。人口二万六千人余りの遠野市に三か所のクラフトビール醸造所があるというのはすごいことである。人口一〇八万人の仙台市でも最近ようやく三か所目が出てきたところである。遠野市の人口当たりのクラフトビール醸造所数はあるいは日本一なのではないだろうか。前述の村上敦司氏、ホップ研究で博士号まで取得していることから「ホップ博士」として親しまれているが、キリンビールを退職後、現在は同社のリサーチファクトリーをしつつ、遠野市に「Brew Note」という、ジャズとクラフトビールが楽しめる店を開いている。ビール好きがビール談義をしに訪れ、ジャズ好きが充実した音響機器でのジャズを聴きに訪れる、ステキな雰囲気のお店である。

参加するブルワリーは年々増え、今年は一二社が参加した。コロナ禍の前は参加するブルワリーの中のどこか一箇所に皆で集まり、どんなビールを造るか話し合い、お互いが持つノウハウを出し合い、そのブルワリーの設備を使って皆で一つのビールを造って、震災のあった三月に全国に向けて出荷していた。これは考えてみるとすごいことである。見ようよってはライバル同士でもあるブルワリーが集まって、企業秘密も言うべきビール醸造のノウハウを出し合っている。キリンとアサヒとサッポロがコラボしたビールがないことも分かるように、こうしたことは通常行われることはない。

しかし、それをこの東北魂ビールプロジェクトは毎年行っているのである。そこには、皆で一緒に震災の恩返しをしたいという思い、そしてまたその根底には「同じ東北」という意識があるに違いない。一緒にこの同じ東北という地域を盛り上げていきたいという思いがあれば、ブルワリー同士は確かにライバルであるかもしれないが、同じ方向を向いた「仲間」であるとも言える。そのようなわけでこの東北魂プロジェクトは二〇一三年以降毎年欠かさず全国に向けた恩返しビールを造ってきたわけである。コロナ禍で人の行き来が難しくなった二〇二〇年以降は、一箇所に集まることは控えて、皆でその年の「お題」を決め、その「お題」に基づいて参加ブルワリーがそれぞれビールを造る形になった。皆で一つのビールを造るといっても素晴らしいが、参加ブルワリーがそれぞれに同じお題でビールを造るといっても魅力的である。なにせ、参加したブルワリーの数だけ限定ビールが出来上がるわけである。その飲み比べも楽しいものであった。

昨年二〇二二年は、その折衷型で、皆で一箇所に集まってレシピを考え、そのレシピに基づいてそれぞれにビールを造り、さらにそれぞれのブルワリーに帰ってからまた同じレシピでビールを造った。同じレシピで造っても醸造設備や造り手の違いで味に違いが出るのがまた興味深かった。この東北魂ビールプロジェクトにキリンビール仙台工場も二〇一七年から参加してくれている。キリンビールは大手ビールメーカーの中でも特にクラフトビールにコミットしているメーカーである。そのキリンビールが参加して特に各社のビールを分析を手掛けた。これまでブルワリー(醸造士)が経験と勘を頼りにやってきたことをデータとして数値化してフィードバックしてくれた。各社はそのデータに基づいてビールの出来を論じることができるようになり、課題解決に大いに役立つたそうである。

今年の東北魂ビールはいつもより早く出来上がった。先に紹介したように、今年は遠野のホップ栽培六〇周年とキリンビール仙台工場操業一〇〇周年である。それにちなんで、今年のお題は「遠野産ホップを六〇パーセント以上使用して醸造すること」であった。ビールのスタイルは自由だったので、本当にバラエティに富んだビールができた。この東北魂ビール、震災で受けた支援の恩返しという趣旨からすれば当然なのだが、毎年の記者会見と試飲会は東京都内で開催されている。それはそれとでも大事なことであるが、一方でこのような素晴らしい取り組みを同じ東北の人にちょっと知ってもらいたいという思いもあった。そこで、たまには東北でもイベントをやってみませんか、このプロジェクトの中心人物であるいわて蔵ビールを造る世嬉の一酒造の佐藤航さんに提案したところ、今回の東北魂ビールは二月四日に仙台市内のクラフトビールレストランを貸し切る形で、参加したブルワリーのブルワリーが勢ぞろいして私のようなビール好きが多数集まって開催された。クラフトビールのいいところはこうして造っている人の顔が見えるところである。しかも、ブルワリーの皆さんが口を揃えて言うのは、地域を盛り上げていきたい、ということである。そういう、地域に対する思い入れのある人たちがクラフトビールの造り手には多数いる。これもまたクラフトビールの素晴らしいところである。そうした思いを持った人たちがお互いに情報交換しながら造り上げたビールがまぶさるうはがらない。どれもそれぞれに個性的で味わい深く、かつ同じように遠野産ホップの華やかな香りが印象的なビールに仕上がっていた。そしてまた、そうしたビールを飲みながらのブルワリーの方々の対話、東北のビールが好きで、ビール好き同士の対話もとても楽しいものであった。

盛岡のペアレ醸造所の寫田洋一さんが「つなぐビール」という本を書いていて、まさに言い得て妙で、ビールとりわけクラフトビールは人と人をつなぐ飲み物と私は思っている。現に、Facebookでつながっている私の知り合いの半分くらいはそうしてビールを飲んでいてつながった人たちである。このクラフトビールの人をつなぐ力まさにこれからの東北にとっても大いに活用すべきものと考えるのである。東北魂ビールは例年通り三月にもまた別のビールを造ることである。今度ほどのようなビールが産み出されてくるのか、今から楽しみである。

行って来た地域が他にもあったが、後発の遠野市でホップ生産が盛んになったきっかけは第一特産農業センターの設置であったという。ホップ生産において、ホップ棚や乾燥機の整備などの費用が掛かり、新規就農のハードルが高かった。それを解決するために機械の共同化と機械施設の共同利用を進めたのである。これが遠野市のホップ栽培の急成長につながった。一九六三年に八ヘクタールでスタートした遠野市のホップ栽培は、一九八三年には一一二ヘクタールになり、一九八七年にホップ生産量全国第一位となった。

遠野市ではその後二〇〇七年に市とホップ農協とキリンビールが合同で「TKプロジェクト」を発足させ、「ホップの里からビールの里へ」を合言葉にホップを活かした地域活性化に取り組んでいる。二〇一五年に始まった夏のイベント「遠野ホップ収穫祭」は、コロナ禍での中止を挟みつつも、今や東北のビールイベントの中でも一大イベントとなっている。また、ホップを観光の要素に取り入れて、ホップ畑やビール醸造所なども巡る「ビアツーリズム」の実施、就農フェアなどを開催して市外から新たなホップ農家を募集し、昨年は新たに六名がホップ栽培に就農したという。

ビール醸造所ができるという。ビール好きは地元産ビールのハシゴをしに、遠野市内を周遊できるわけである。人口二万六千人余りの遠野市に三か所のクラフトビール醸造所があるというのはすごいことである。人口一〇八万人の仙台市でも最近ようやく三か所目が出てきたところである。遠野市の人口当たりのクラフトビール醸造所数はあるいは日本一なのではないだろうか。前述の村上敦司氏、ホップ研究で博士号まで取得していることから「ホップ博士」として親しまれているが、キリンビールを退職後、現在は同社のリサーチファクトリーをしつつ、遠野市に「Brew Note」という、ジャズとクラフトビールが楽しめる店を開いている。ビール好きがビール談義をしに訪れ、ジャズ好きが充実した音響機器でのジャズを聴きに訪れる、ステキな雰囲気のお店である。

しかし、それをこの東北魂ビールプロジェクトは毎年行っているのである。そこには、皆で一緒に震災の恩返しをしたいという思い、そしてまたその根底には「同じ東北」という意識があるに違いない。一緒にこの同じ東北という地域を盛り上げていきたいという思いがあれば、ブルワリー同士は確かにライバルであるかもしれないが、同じ方向を向いた「仲間」であるとも言える。そのようなわけでこの東北魂プロジェクトは二〇一三年以降毎年欠かさず全国に向けた恩返しビールを造ってきたわけである。コロナ禍で人の行き来が難しくなった二〇二〇年以降は、一箇所に集まることは控えて、皆でその年の「お題」を決め、その「お題」に基づいて参加ブルワリーがそれぞれビールを造る形になった。皆で一つのビールを造るといっても素晴らしいが、参加ブルワリーがそれぞれに同じお題でビールを造るといっても魅力的である。なにせ、参加したブルワリーの数だけ限定ビールが出来上がるわけである。その飲み比べも楽しいものであった。

昨年二〇二二年は、その折衷型で、皆で一箇所に集まってレシピを考え、そのレシピに基づいてそれぞれにビールを造り、さらにそれぞれのブルワリーに帰ってからまた同じレシピでビールを造った。同じレシピで造っても醸造設備や造り手の違いで味に違いが出るのがまた興味深かった。この東北魂ビールプロジェクトにキリンビール仙台工場も二〇一七年から参加してくれている。キリンビールは大手ビールメーカーの中でも特にクラフトビールにコミットしているメーカーである。そのキリンビールが参加して特に各社のビールを分析を手掛けた。これまでブルワリー(醸造士)が経験と勘を頼りにやってきたことをデータとして数値化してフィードバックしてくれた。各社はそのデータに基づいてビールの出来を論じることができるようになり、課題解決に大いに役立つたそうである。

今年の東北魂ビールはいつもより早く出来上がった。先に紹介したように、今年は遠野のホップ栽培六〇周年とキリンビール仙台工場操業一〇〇周年である。それにちなんで、今年のお題は「遠野産ホップを六〇パーセント以上使用して醸造すること」であった。ビールのスタイルは自由だったので、本当にバラエティに富んだビールができた。この東北魂ビール、震災で受けた支援の恩返しという趣旨からすれば当然なのだが、毎年の記者会見と試飲会は東京都内で開催されている。それはそれとでも大事なことであるが、一方でこのような素晴らしい取り組みを同じ東北の人にちょっと知ってもらいたいという思いもあった。そこで、たまには東北でもイベントをやってみませんか、このプロジェクトの中心人物であるいわて蔵ビールを造る世嬉の一酒造の佐藤航さんに提案したところ、今回の東北魂ビールは二月四日に仙台市内のクラフトビールレストランを貸し切る形で、参加したブルワリーのブルワリーが勢ぞろいして私のようなビール好きが多数集まって開催された。クラフトビールのいいところはこうして造っている人の顔が見えるところである。しかも、ブルワリーの皆さんが口を揃えて言うのは、

地域を盛り上げていきたい、ということである。そういう、地域に対する思い入れのある人たちがクラフトビールの造り手には多数いる。これもまたクラフトビールの素晴らしいところである。そうした思いを持った人たちがお互いに情報交換しながら造り上げたビールがまぶさるうはがらない。どれもそれぞれに個性的で味わい深く、かつ同じように遠野産ホップの華やかな香りが印象的なビールに仕上がっていた。そしてまた、そうしたビールを飲みながらのブルワリーの方々の対話、東北のビールが好きで、ビール好き同士の対話もとても楽しいものであった。



朝霧



霜の朝



白鳥とひなび



後追いひなび



早池峰山とひなび

シリーズ 遠野の自然
「遠野の大雪」
遠野 1000 景より

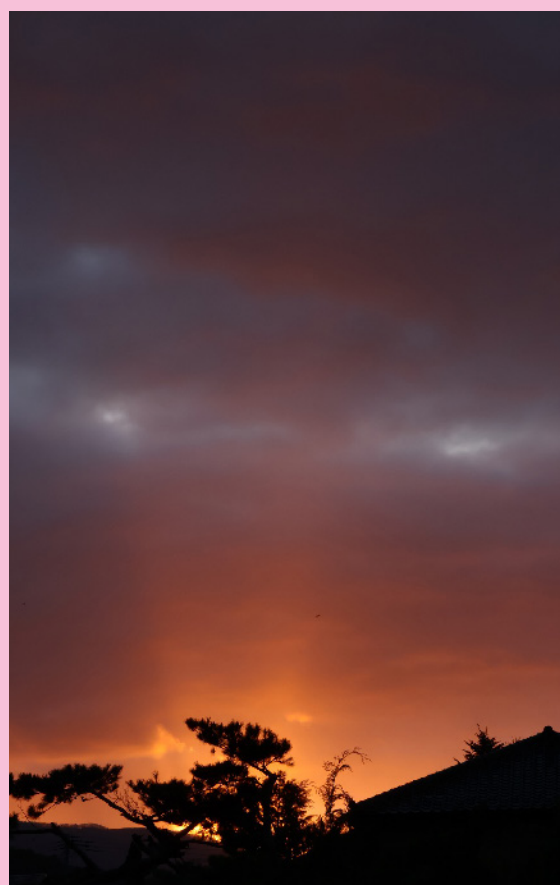
もう師走の十二月も半ばである。遠野にはもう雪が降ったようだ。
あわただしい生活でてんやわんやしているうちに、そんな季節を迎えていることもすっかり忘れていた。
毎年思うことだが、一年はほんとに早く過ぎて行く。もつとゆつくりでいいのにと思ふのだが、あつという間に一年が終わる。
新たな年はどんな年になるだろうか。あちこちで起きている戦争や紛争が終わり、この国も安定した国に戻ることを切に願う。
たったひとりの活動など取るに足りないと思いつつも、何か良いことを後の世に残していきたいと考えるこの頃である。



見上げる紅葉



ハナワラビ



太陽柱か



写真でお伝えする 東北の風景

「祭りと晩秋 と雪景色」

写真撮影
尾崎匠

